『大和物語』在中将諸段の構成

――第一六〇段～一六六段――

森本　茂

一

『大和物語』は、宇多天皇の寛平から朱雀天皇の天慶までの、事実に基づく歌話を主体とする第一部と、それを遡る古い年代のころの、説話的・伝説的な歌話を主体とする第二部とに分けられる。第一部と第二部の境をどこに置くか。『大系』『古典全書』は第一四七段以後（最終の第一七三段まで）を第二部とし、『全集』は第一四一段以後を第二部とする。この点について雨海博洋氏は、一四七段からは、物語の形態材料において、一四六段以前との相違があり、この段を境目として前後篇に分つことができる。一四五、一四六段はともに亭子院（宇多帝）と遊女白（玉淵女）とに関したもので、亭子院の退位（一段）、出家・山踏み（二段）といった書き出しと首尾相応じ、かつ寛平～天暦の事柄をあつかった前篇の部に入るべき内容であるとみることができる。[1]

といわれ、首尾呼応する構成をとる点からみて、第一四六段までを第一部、第一四七段以後を第二部とされた。この区分の基準は妥当であるし、一般に第一四七段以後を第二部とするので、本稿もそれに従うこととしたい。

第二部は二十七段あり、全体の約六分の一に過ぎないが、その分量は全体の約三分の一を占める。ということは、第二部の段は第一部にくらべて一般に長大であることを表している。内容的には昔の説話的・伝説的な歌話を主体としていて、散文的であり、昔の純愛・あわれな話が収録されている。

第二部の構成については、高橋正治氏が「大和物語構成図表」[2]の中で、第一義的章段と副次的章段に分けて図示しておられる。それによれば、第一義的章段は第一四七～一四九段、第一五〇段、第一五四～一五六段、第一五七～一五八段、第一六九段で、他は副次的章段に分類されている。この展開図は人物・事柄に関する連想を基底にして、その内容群に合う歌話が続くか否かをめどにして作成されたもので、前後の歌話との連関をみる上から適切である。

それに対して、本稿では第二部の歌話の性格に立ち入って分析を進めたいので、第二部の構成を別の観点から分類したいと思う。すなわち、第二部は、「地方の説話・伝説」と「六歌仙の歌話」を主体とし、他に若干の「第一部の拾遺段」を加える、といえよう。その内訳は次のようである。

第一四七段　生田川伝説（摂津国）
第一四八段　芦刈伝説（同）
第一四九段　竜田山説話（大和国）
第一五〇段　猿沢池伝説（同）
第一五一段　竜田川遊覧（同）
第一五二段　手鷹説話
第一五三段　平城帝の歌話
第一五四段　竜田山ゆふつけ鳥説話（大和国）
第一五五段　安積山伝説（陸奥国）
第一五六段　姨捨山伝説（信濃国）
第一五七段　馬槽説話（下野国）
第一五八段　二人妻説話（大和国）
第一五九段　染殿内侍の歌話
第一六〇段　在中将の歌話（六歌仙）
第一六一段　在中将の歌話（同）
第一六二段　在中将の歌話（同）
第一六三段　在中将の歌話（同）
第一六四段　在中将の歌話（同）
第一六五段　在中将の歌話、在中将の死（同）
第一六六段　在中将の歌話（同）
第一六七段　二人妻説話
第一六八段　僧正遍昭の歌話（六歌仙）
第一六九段　井手の下帯説話〈中断〉
第一七〇段　藤原伊衡の歌話
第一七一段　藤原実頼の歌話〈中断〉
第一七二段　大伴黒主の歌話（六歌仙）
第一七三段　僧正遍昭の歌話（同）

以上の結果、「地方の説話・伝説」は十一段（約四十一パーセント）を数え、中でも大和国が最も多く六段である。また、「六歌仙の歌話」は十段（約三十七パーセント）を数え、中でも在中将が最も多く七段である。

ところで、第二部の歌話は、第一部とまったく無関係な歌話を収録したのか、それとも、第一部と何らかの関係（歌材・テーマなど）のある歌話を収録したのか。「地方の説話・伝説」は、各地方で長く伝承されてきた話だけあって、その話の内容がユニークで、他の追随を許さぬものが多く、第一部との関係はあまり見出せないようだ。わずかに次の二段が指摘できよう。

○　第一五〇段で平城帝が采女を一度だけ召して、後召されなかったので、采女が非常に悲しむ話は、第十五段で陽成院が若狭の御を一度だけ召して、後召されなかったので、若狭の御が「数ならぬ」の歌をよんで嘆く話に類似する。

○　第一五八段で二人妻が壁を隔てて住む話は、第十一段で故源大納言（源清蔭）に二人妻がいて、清蔭はもとの妻（東の方）から離れたが、もとの妻の邸内に同居する話に類似する。

また、「六歌仙の歌話」も、後述する在中将を除くと、第一部との関係はあまり見出せない。わずかに次のものがある。

○　第一六八段で山歩きしている遍昭を、五条の后の宮（順子）から遣わされた内舎人が捜す話は、第二段で亭子院が山歩きしておられるのを、醍醐天皇から遣わされた少将（在原友干）や中将（藤原仲平）がお供しようとした話に類似する。

また、「第一部の拾遺段」では、次のものがある。

○　第一五九段で染殿内侍の染色の話は、第三段で宇多院の六十の賀を京極御息所（褒子）がなさるというので、故源大納言（源清蔭）を通してとしこが染色を依頼された話に類似する。

○　第一六七段の二人妻の話は、前述の第十一段の話に若干類似する。

結局、第二部のうち在中将の七段以外の二十段では、右の五段（四分の一）に第一部との類似点が認められる。

それに対して、在中将の七段をみると、歌材が第一部と同じか、それに近いものがかなり多い。さらに共通の歌材をまとめて配列しており、構成意識もみられるようである。これらの点について、次に述べて行きたい。

二

『大和物語』（為家本）第一六〇～一六六段は、在中将（在原業平）の歌話である。初めにこれらの歌話の出所について、検討しておく必要がある。その際注目されるのは、第一六六段の末尾の文である。それは二条家本系統の為家本・為氏本などに、

これらは物がたりにて、よにあることどもなり。

とある。一方、六条家本系統の諸本には、

これらは物がたりにて、よにあるほかのことどもなり。（勝命本）

これは物がたりにて、世にあるよりほかの事どもなり。（御巫本）

これは物がたりにて、世にあるほかの事どもなり。（鈴鹿本）

とある。「これら」と「これ」の違いについては、高橋正治氏がいわれたように、[3]「これ」とある本にも「事ども」と複数のままになっているから、「これら」が本来の形であったとみられる。そして「これら」は、第一六〇～一六六段のすべてを受けると考えられる。

次に、二条家本系統の「よにあることども」と、六条家本系統の「よにある（より）ほかの事ども」とでは、正反対の内容になるが、この点について、今井源衛氏は、

この「世にある（より）ほかの事ども」という文字も、いかにも窮屈であり、普通ならば、「世にあるには異なることども」

とか「世の物語には異なる」とか書きそうにも思われるのである。「世にある事ども」の中間に後から「(より)ほかの」の文字を挿み込んだ為ではなかろうか。とにかく、この末文に関するかぎりでは、二条家本の優位が云えそうに思われる。[4]といわれた。これに従い、二条家本系統の本文によりたいと思う。

「これらは物がたりにて、世にあることどもなり」の意味について、北村季吟は『大和物語抄』で、

この業平の物語は、世がたりに語り伝へて、誰も知るべき事どもなるべしとにや。又、伊勢物語などにて、世に伝ふることどもなりとにも侍るべし。

といって、「歌がたり」または『伊勢物語』によって世間に知れわたっている事ども、と解している。現在もこの二説がある。すなわち、「歌がたり」とみるのは、高橋残夢の『管窮抄』、武田祐吉・水野駒雄著『大和物語詳解』、雨海博洋[5]氏、片桐洋一[6]氏などであり、『伊勢物語』(あるいは『業平集』)とみるのは、『大系』『古典全書』『全集』、山田清市[7]氏などであり、両者にわたるとするのが、柿本奨著『大和物語の注釈と研究』である。

じつは、在中将の歌話の出所を「歌がたり」とみるか『伊勢物語』(あるいは『業平集』)とみるかは、特に第一六〇段と第一六五段前半の歌話の出所と大きくかかわりがある。

第一六〇段(全文は後述)は、在中将と染殿内侍の歌話で、次の二組の贈答歌からなる。

A秋萩をいろどる風の吹きぬれば人の心もうたがはれけり　(染殿内侍)
秋の野をいろどる風は吹きぬとも心はかれじ草葉ならねば　(在中将)

B大幣になりぬる人のかなしきは寄る瀬ともなくしかぞ泣くなる　(染殿内侍)
流るともなにとか見えむ手をとりて引きけむ人ぞ幣と知るらむ　(在中将)

Aの贈答歌は『後撰集』巻五・秋上にもみえるが、そこには「よみ人しらず」「在原業平朝臣」(初句「秋萩を」)とあり、女の名が明記されていない。ただ『在中将集』(前田家本)には、「染殿の内侍のもとに通ひけるころ、女」「返し」とあり、染殿内侍の名がみえる。しかし、『在中将集』は片桐氏・山田氏によれば、[8]『後撰集』から『古今和歌六帖』までの間の成立といわれ、『大和物語』に先行せず、「大和物語→在中将集」の関係にあるといわれ、参考にはならない。

Bの贈答歌は、『伊勢物語』(天福本)第四十七段に、「大幣の引く手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ」(女)、「大幣と名にこそ立てれ流れてもつひに寄る瀬はありといふものを」(男)という類歌があり、この同じ類歌が『古今集』巻十四・恋四・七〇六・七〇七に「よみ人しらず」「業平」とあるが、Bと同じ歌はみえない。結局、第一六〇段の歌話が在中将と染殿内侍のものであることは、『大和物語』が初出である。

また、第一六五段（全文は後述）は、在中将と弁の御息所の歌話で、次の二首の和歌からなる。

つれづれといとど心のわびしきに今日はとはずて暮してむとや　（在中将）

つひに行く道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを　（同）

「つひに行く」の歌は業平の辞世の歌で、『伊勢物語』『古今集』『業平集』（諸本）にみえるが、「つれづれと」の歌は『在中将集』（前田家本）と『業平集』（書陵部蔵雅平本）の「他本」の部にだけみえる。しかしこの両本とも『大和物語』以後の成立といわれ、参考にならない。第一六五段の「つれづれの」の歌が業平から弁の御息所に贈られたことは、『大和物語』が初出である。

以上の第一六〇段と第一六五段前半の歌話は、『伊勢物語』にも『古今集』にもみえないのだが、ではどこから収録したのだろうか。

現存の『伊勢物語』は、定家本系統本で一二五段からなるが、『大和物語』が成立した天暦五年（九五一）ごろに、[9]『伊勢物語』がどの程度の成長増益を経ていたか、その確かなことは不明である。第一六三段の「植ゑし植ゑば」の歌話は、『伊勢物語』第五十一段と同じであり、第一六四段の「あやめ刈り」の歌話は、『伊勢物語』第五二段と同じであり、両者順序まで一致している。『大和物語』の二首の順序が偶然に『伊勢物語』と一致したとは考えにくく、『大和物語』は『伊勢物語』を見てそのままの順に収録したのであろう。すると、第一六六段末尾の「物語」は、成長増益中の『伊勢物語』をさすと考えられる。

ところが一方、第一六〇段と第一六五段前半の歌話が、かりに当時の『伊勢物語』か『在原業平集』の中にあったとすれば、その一部でも断簡としてでも後世に残りそうだが、その形跡はまったくみられないのは、本来これらの話は、『伊勢物語』あるいは『業平集』になかったのであろう。それらは「歌がたり」によったと考えざるをえない。

『今昔物語』巻二十七の七話「在原業平中将女被喰鬼語」は、業平が美女を盗み出して、北山科の荒れた校倉の中に連れこみ、臥していると、にわかに雷電霹靂したので、業平は太刀を抜いて立ち向い、雷は鳴りやんだが、夜が明けて見ると、女の頭と衣だけ残っていて、女は倉に住む鬼に食われていた、という話で、これに似た話は『伊勢物語』第六段の「鬼一口の話」がある。

また、『古事談』巻二の二十八話「業平、小町の歌に下句を付する事」は、業平が高子を盗み出そうとして、高子の兄たちに奪い返されたとき（『伊勢物語』第六段の末尾と一致）、髻を切られ、髪が伸びるまで歌枕を見に下り、奥州八十嶋に宿った夜、小野小町の髑髏の目穴から薄の生えているのを見て、あわれを催した話で、『江家次第』巻十四、『和歌童蒙抄』巻七、『無名抄』などにも同じ話がある。

これらは『伊勢物語』に似た話、あるいは、伊勢物語の後日譚で、怪奇性を加えて話をおもしろく展開していて、到底業平の実

話とは考えられないが、業平に関する、あること、ないことの「歌がたり」が、『伊勢物語』や『業平集』とは別に世間に流布していたことを推定させる。

以上によって、業平の話は『伊勢物語』となり「歌がたり」となり両者が補い合う形で人々の耳目に入っていたと考えられる。第一六六段末尾の「物語」は、成長増益中の『伊勢物語』と「歌がたり」の両者にわたるとみたい。「これらは物語にて……」は、「これらの在中将の歌話は、『伊勢物語』や『歌がたり』となって、世間に知れわたっている事どもである」の意となろう。

三

それでは、『伊勢物語』と「歌がたり」の中から、第一六〇～一六六段は何を基準にして選ばれたのだろうか。まず考えられるのは、第一部で「恋のあはれ」が八十二段を占めて主流をなす[10]のを受けて、この七段も男女間の愛情をテーマにしたものを選択したといえる。

しかしながら、たとえば『伊勢物語』第四段の「西の対の女」の話や、第五段の「築地のくずれ」の話、第六十九段の「伊勢斎宮」の話、第一二三段の「深草の女」の話など、一際あわれ深い話が採られていないのはなぜか。それは、これらを選ぶに際して、在中将の「恋のあはれ」の歌話なら何でも採るというのではなく、特に優れた内容だから採るというのでもなく、何か他の基準があったのだろうと考えたい。

その基準は次の二つであろう。

(1)在中将と後宮の女との歌話に限る。

(2)第一部の歌材と同じか、それに近い内容の歌を選ぶ。

以下、各段ごとに述べて行くこととする。

第一六〇段

おなじ内侍に、在中将住みける時、中将のもとによみてやりける、

秋萩をいろどる風の吹きぬれば人の心もうたがはれけり

とありければ、返し、

秋の野をいろどる風は吹きぬとも心はかれじ草葉ならねば

となむいへりける。

かくて、住まずなりてのち、中将のもとより、衣をなむしにおこせたりける。それに、「洗はひなどする人なくて、いとわびしくなむある。なほかならずしてたまへ」となむありければ、内侍、「御心もてあることにこそはあなれ。

大幣になりぬる人のかなしきは寄る瀬ともなくしかぞ泣くなる」

となむいひやりたりける。中将、

流るともなにとか見えむ手をとりて引きけむ人ぞ幣と知るらむ

となむいひける。

この段は前段の染殿内侍の歌話の並びであるが、一連の在中将

の話としては初出である。前半と後半に分かれ、前半は染殿内侍のもとに在中将が通っていたころの贈答歌で、たがいに相手を疑いながらも仲睦まじかった初期のころの話、後半は後日の冷めた関係の交渉が書かれている。前述したように、前半の贈答歌は『後撰集』には「よみ人しらず」「在原業平朝臣」とある。この話が染殿内侍と在中将のものであることは、「歌がたり」によったと考えられる。

この段の歌材の中心は「衣」である。着物は直接身につける物であり、その仕立てを女に依頼するのは、二人の親密な関係の復活を願う男の気持を表している。「衣」「洗はひ」は第一部の第二十七段で、比叡山に住む戒仙が、親のもとに衣を洗いに寄こす話に類似する。

第一六一段

在中将、二条の后の宮まだ帝にも仕うまつり給はで、ただ人におはしましける世に、よばひ奉りける時、ひじきといふ物をおこせて、かくなむ、

思ひあらばむぐらの宿に寝もしなむひじき物には袖をしつつも

となむのたまへりける。返しを人なむ忘れにける。

さて、后の宮、春宮女御と聞えて、大原野にまうで給ひけり。御ともに、上達部、殿上人、いと多く仕うまつりけり。在中将も仕うまつれり。おほむ車のあたりに、なま暗きをりに立てりけり。宮しろ（諸本「宮しろにて」。「御社にて」か）、おほかたの人々禄賜はりてのちなりけり。御車のしりより、奉れるおほむ単の御衣をかづけさせ給へりけり。在中将、賜はるままに、

大原や小塩の山も今日こそは神代のことを思ひ出づらめとしのびやかにいひけり。昔を思し出でて、をかしとおぼしけり。

この段も前半と後半に分かれる。前半は『伊勢物語』には、次のようにある。

昔、男ありけり。懸想じける女のもとに、ひじきもといふ物をやるとて、

思ひあらばむぐらの宿に寝もしなむひじきものには袖をしつつも

二条の后のまだ帝にも仕うまつり給はで、ただ人にておはしましける時のことなり。（三段）

また、後半は『伊勢物語』には、次のようにある。

昔、二条の后のまだ春宮の御息所と申しける時、氏神にまうで給ひけるに、近衛府にさぶらひける翁、人々の禄賜はるついでに、御車より賜はりて、よみて奉りける。

大原や小塩の山も今日こそは神代のことも思ひ出づらめとて、心にもかなしとや思ひけむ、いかが思ひけむ、知らずかし。（七十六段）

今井氏は、『伊勢物語』第三段の、「ひじきもといふ物」「二条の后のまだ帝にも仕うまつり給はで、ただ人にておはしましける

時」の部分が、ほとんど正確に『大和物語』の本文と一致するので、「類話というよりは、何らかの書承関係を推察させるのである」[11]といわれたが、もっともである。ただ『伊勢物語』では「懸想じける女」が相手で、二条の后は補足的・暴露的に登場するに過ぎないが、『大和物語』では最初から「二条の后」が相手であり、同じ「歌物語」といっても、両書の性格の違いが表れている。

後半の「おほむ車のあたりに、なま暗きをりに立てりけり。……在中将、賜はるままに」の部分は、『伊勢物語』には、「近衛府にさぶらひける翁、……よみて奉りける」とあり、『古今集』には、「二条の后の、まだ東宮の御息所と申しける時に、大原野にまうで給ひける日よめる（同歌）業平の朝臣」（巻十七・雑上・八七一）とある。『大和物語』では、二条の后が業平へ特別に衣を賜給しやすいように、業平が車の近くに、薄暗いときに立っていた、という状況を設定し、車の後部から二条の后のお召しの着物を禄として賜わったとある。これらは『大和物語』にだけあり、特に注目される。この点について、今井氏は、

二月か十一月という寒い季節に、重ね着た袿の下のそれを、車中で脱いで与えるというのも、いかに二条の后とは云え、いささか作りごとが過ぎる。これもなまめかしい后の肌の香やぬくもりがそのまま伝わってくる為の作者の工夫であろう。

といわれたが、まさにその通りで、前段の歌材の「衣」がこの段でも中心で、「おほむ単の御衣」にこもる二条の后の肌の香やぬくもりを通して、業平は恋の回想にひたっているのである。二条の后の「おほむ単の御衣」を賜わるという構想は、前段の「衣」と歌材を同じにするためであり、『大和物語』作者の虚構であると考えられる。

第一六二段

又、在中将、内にさぶらふに、御息所の御方より、忘れ草をなむ、「これは、なにとかいふ」とて給へりければ、中将、

忘れ草生ふる野べとは見るらめどこはしのぶなりのちも頼まむ

となむありける。おなじ草を、しのぶ草、忘れ草といへば、それよりなむよみたりける。

この話は、『伊勢物語』第一〇〇段には、次のようにある。

昔、男、後涼殿のはざまを渡りければ、あるやむごとなき人の御局より、忘れ草を、「しのぶ草とやいふ」とて、出だせ給へりければ、賜はりて、

忘れ草生ふる野べとは見るらめどこはしのぶなりのちも頼まむ

『在中将集』（前田家本）、『業平集』（雅平本）の「他本」の部にもあるが、前述したようにこれらは『大和物語』以後の成立で、参考にならない。

忘れ草は、『和名抄』に、「萱草、一名忘憂、和須礼久佐（巻二十）とあり、ユリ科の宿根草である。しのぶ草は、『和名抄』に、「垣衣、一名烏韮、之乃布久佐」（巻二十）とあり、ウラボシ科の

シダである。このように両者は別の草であるのに、この段で同じ草だと言った点については、賀茂真淵が『大和物語直解』で、

明らかに別なるを、此物語かく人の誤れる也。是より後の人さまざまいへど、皆ふるき事を知らで、此物語などによれるは、いふにもたらぬわざなり。

といったように、『大和物語』作者の誤解である。

その誤解の由来について、今井氏は、『伊勢物語』では、女が忘れ草をさして、「しのぶ草とやいふ」と言ったのであるのに、『大和物語』作者は、女が「忘れ草をしのぶ草とやいふ」と言ったのだと誤解したのだろう[13]といわれた。当時の文は会話に「　」をつけないので、こういう誤りも生じたのだろう。

ところで、『大和物語』の「御息所」は、『伊勢物語』には「あるやむごとなき人」とあるが、どちらにしても人名は明らかでない。しかし、『大和物語』では、第一六一段にも第一六三段にも二条の后（高子）が登場するから、この段の「御息所」も二条の后であろう。

高子を「御息所」と呼んだ時期は、前段で引用した『古今集』巻十七の詞書に、「二条の后の、まだ東宮の御息所と申しける時」とあり、陽成天皇の皇太子時代（貞観十一年二月～同十八年十一月）[14]のことで、前段に「春宮女御」とある時期と一致する。本来『伊勢物語』では特定の人名は不明であったが、『大和物語』では、前段の「春宮女御」から同意の「東宮の御息所」を連想し、「御息所」で二条の后を暗示させたと考えられる。『大和物語鈔』も「御息所」を二条の后と解したらしく、この段を「前段のならび」とする。

この段は、草花の「忘れ草」と「しのぶ草」を歌材とし、「あなたを忘れていない。人目を忍んで恋しく思っている」という男の気持が中心である。「忘れ草」を歌材としたのは、第一部の第十六段で、陽成院のすけの御とままちの少将が、忘れ草を歌材にして贈答したのに類似する。

四

第一六三段

在中将に、后の宮より菊召しければ、奉りけるついでに、

植ゑし植ゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや

と書いつけて奉りける。

この話は、『伊勢物語』第五十一段には、次のようにある。

昔、男、人の前栽に菊植ゑけるに、

植ゑし植ゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや

また、『古今集』に、「人の前栽に菊を結びつけて植ゑける（同歌）在原業平の朝臣」（巻五・秋下・二六八）、『在原業平朝臣集』（神宮文庫蔵）に、「人のもとなる前栽に結ひつけ侍ける（同歌）」（八）とある。

これらに「人」とあるが、『大和物語』には「后の宮」とある。

山田氏はこの「后の宮」は、『原撰業平集』によったのだろうといわれたが、私は前段までにならって、『大和物語』作者の虚構であろうと思う。本来は『伊勢物語』などのように、業平が普通の人に菊（当時は外来の珍しい草花）を贈る歌であったが、『大和物語』では、かつての恋人の二条の后に贈ることにして、変らぬ慕情を表している。

この段は、前段と同じく草花の「菊」を歌材にしている。「菊」を歌材としたのは、第一部の第四十九段で、宇多天皇が斎院の皇女（第三皇女の君子内親王）に菊を贈られた話に類似する。

第一六四段

在中将のもとに、人の、飾りちまきをおこせたりける返り事に、かくいひやりける、

あやめ刈り君は沼にぞまどひける我は野に出でて狩るぞわびしき

とて、雉をなむやりける。

この話は、『伊勢物語』第五十二段には、次のようにある。

昔、男ありけり。人のもとより飾りちまきおこせたりける返りごとに、

あやめ刈り君は沼にぞまどひける我は野に出でて狩るぞわびしき

とて、雉をなむやりける。

この歌は同音の「刈る」「狩る」を用いて、君と我の行為を対照的によんだ点におもしろさがある。『伊勢物語』も『大和物語』も相手は「人」であり、本来は同性の友人であろうが、『大和物語』作者は、「あやめ」に「文目」（見分け、物の判断）をかけ、方角が分からず迷う意の「惑ふ」に、心が乱れる意の「惑ふ」をかけ、「あやめ」と「まどふ」を縁語とし、「人」は前段までと同じく二条の后を暗示し、業平が二条の后をしのんで心を惑わす意を含めていよう。『鈔』も「人」を二条の后と解したらしく、この段を前段の「ならび」としている。

この段は、前段と同じく草花の「あやめ」を歌材とする。「雉」を返すのは、第一部の第八十二段で、藤原季縄女の右近に、故権中納言（藤原敦忠）が雉を贈る話に類似する。

第一六五段

水の尾の帝の御時、左大弁のむすめ、弁の御息所とていますかりけるを、帝御ぐしおろし給うてのちに、ひとりいますかりけるを、在中将、しのびて通ひけり。中将病いと重くしてわづらひける、もとの妻どももあり。これはいとしのびてあることなれば、え行きもとぶらひ給はず。しのびしのびになむとぶらひけること、日々にありけり。さるに、とはぬ日なむありける。病もいと重りて、その日になりにけり。中将のもとより、

つれづれといとど心のわびしきに今日はとはずて暮してむとや

とておこせたり。弱くなりにたりとて、いといたく泣きさわぎて、返り事などもせむとするほどに、「死にけり」と聞き

て、いといみじかりけり。死なむとすること今々となりて、よみたりける、

つひに行く道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを

とよみてなむ絶えはてにける。

この話は前半と後半に分かれる。前半は前述したように、『伊勢物語』『古今集』『業平集』などにみえず、「歌がたり」などによったのだろう。「左大弁」について『鈔』は、

藤原良近也。いせ物語には左中弁と有り。後左大弁也。中納言吉野ノ四男、神祇伯、従四位下也。

というが、今井氏は良近の官歴を調べて、左大弁にはなっていないといわれた。[16] 結局、「左大弁」が誰をさすかは未詳である。

後半は『伊勢物語』第一二五段には、次のようにある。

昔、男、わづらひて、心地死ぬべくおぼえければ、

つひに行く道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを

また、『古今集』に、「病して弱くなりにける時、よめる（同歌）業平の朝臣」（巻十六・哀傷歌・八六一）、『在原業平朝臣集』（神宮文庫蔵）に、「病して、かぎりとおもたへしに、人に遣はしける」（五八）とある。

ところで、『大和物語』よりやや後の成立といわれる『在中将集』（前田家本）には、

水の尾の御時、右大弁のむすめ弁の御息所とてさぶらひけるを、帝御ぐしおろさせたまて後、いとしのびて語らひけるほどに、わづらふことありければ、しのびて、女、日々にとぶらひけるを、いかなる事かありけむ、消息をこせざりける日、心地もいと弱うなりにければ、いひやりける、

つれづれといとど心地のわびしきに今日はとはずて暮してむとや　（二八）

わづらひて、今はかぎりとおぼえければ

つゐにゆく道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを　（八二）

のように、二首別々のときの歌としてあり、『業平集』（雅平本）もほぼこれと同文で、別々にある。この両集がもし『大和物語』によったのならば、二首にして離れ離れに載せることはないだろうのに、別々のときの歌になっていのは、『大和物語』以外の、「歌がたり」や『伊勢物語』などによったためであり、この二首の歌は、本来別々のときの歌であったのだろう。それを『大和物語』作者が、「病」をつなぎとして一連の歌話に仕上げ、後半を主に前半を従に構成したのだろう。

この段は、「今日」「昨日」を歌材とする。「死」をよんだものは、第一部の第五十五段で、人の国へ下った男が死ぬ話に類似する。

第一六六段

在中将物見に出でて、女のよしある車のもとに立ちぬ。下す

だれのはざまより、この女の顔いとよく見てけり。物などいひかはしけり。これもかれも帰りて、あしたによみてやりける

見ずもあらず見もせぬ人の恋しきはあやなく今日やながめ暮さむ

とあれば、女、返し、

見も見ずも誰と知りてか恋らるるおぼつかなさの今日のながめや

とぞいへりける。

これらは物がたりにて、世にあることどもなり。

この話は、『伊勢物語』第九十九段には、次のようにある。

昔、右近の馬場のひをりの日、向ひに立てたりける車に、女の顔の下すだれよりほのかに見えければ、中将なりける男のよみてやりける。

見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ暮さむ

返し、

知る知らぬなにかあやなく分きていはむ思ひのみこそしるべなりけれ

また、『古今集』に、「右近の馬場のひをりの日、向ひに立てたりける車の下すだれより、女の顔のほのかに見えければ、よみて遣はしける（同歌）在原業平朝臣」（巻十一・恋一・四七六）、「返し、（同歌一「知る知らぬ」）よみ人しらず」（同・四七七）とある。

ところが、『在中将集』（前田家本）には、

右近の馬場の手つがひに、向ひに立てりける車の下すだれより、はつかに女の見えければ、遣はしける

見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ暮さむ　（二二）

返し

見も見ずも誰と知りてか恋らるるおぼつかなさの今日のながめや　（二三）

此歌多本無一本有之

又

知る知らぬなにかあやなく分きていはむ思ひのみこそしるべなりけれ　（二四）

とある。これらによれば、女の返歌に「見も見ずも」と「知る知らぬ」の二首があったことになる。現在伝わる『伊勢物語』『古今集』の諸本や、『在中将集』以外の『業平集』の諸本は、すべて「知る知らぬ」の歌だけがあり、「見も見ずも」の歌はない。

しかし、顕昭の『古今集註』に、

又、伊勢物語ノ中ニハ、事外ノ歌次第モカハリ、広略ハベル中ニ、普通本トオボシキニハ、左近ノムマバノヒヲリノ日トカキテ、中将ナリケルオトコトカケリ。普通ニタガヒタル本ニハ、右近ノ馬場ノテツガヒノヒトカキテ、中将ナリケル人トカケリ。……但、普通伊勢物語ニハ、古今ノマ、ノ贈答也。普通ナラヌ本ニハ、此歌ノ返歌ヲ女ノカヘシトテ、「ミモミヌモタレトシリテカコヒラル、オボツカナミノケフノナガメ

ヤ」、又、「オトコ返シ」「シルシラヌナニカアヤナクワキテイハムオモヒノミコソシルベナリケレ」。（巻十一）

とあり、「普通伊勢物語」は「知る知らぬ」を女の返歌とし、「普通ニタガヒタル本」は「見も見ずも」を女の返歌とし、それに対する男の返歌を「知る知らぬ」とする。また、『在中将集』のようだと、「見も見ずも」「知る知らぬ」の両歌が女の返歌となる。

顕昭のいう「普通ニタガヒタル本」は現在明らかでないが、かりにその『伊勢物語』が平安時代中・後期に存在したとすれば、女の返歌を「知る知らぬ」とする本と、「見も見ずも」とする本があり、『大和物語』はその後者の流れる汲むということになる。この二首のうち、男の歌に対する答歌としては、「見も見ずも」の方がよく適合する。すなわち、「見も見ずも」の歌は、贈歌の「見る」「今日」「ながめ」の語を受け、両歌とも「みず」（水）、「み」（水）、「ながめ」（長雨）が縁語となり、両歌がよく調和している。

この段は、前段と同じく「今日」を歌材とする。柿本氏が、「前段で臨終の話をしたから、本段は名残の話である」[17]といわれた通り、前段で業平の死をえがいて、在中将の歌話はいちおう終了したが、前段の「昨日今日」の語に引かれて、「今日のながめ」の歌話を補足したのであろう。したがって、女の名は特に必要としなかったのであろう。

五

以上の在中将諸段（第一六〇～一六六段）の構成をまとめると、次のようになる。

第一六〇段—在中将と染殿内侍の歌話
第一六一段—在中将と二条の后の歌話　衣
第一六二段—在中将と二条の后の歌話
第一六三段—在中将と二条の后の歌話
第一六四段—在中将と二条の后の歌話　草花
第一六五段—在中将と弁の御息所の歌話と在中将の死
第一六六段—在中将と女車の主の歌話　今日

第一五九段に染殿内侍と右大臣源能有の歌話を収録したので、第一六〇段は染殿内侍をつなぎとして、染殿内侍と在中将の歌話を収録した。次の第一六一段は在中将をつなぎとして、在中将と二条の后の歌話を収録した。この段は前半の若年の恋と、後半の後年の話を結びつけているから、在中将と二条の后の歌話は、本来この段だけのつもりであったろうが、草花に関連のある、気のきいた小話を二条の后の話に仕立て、第一六二～一六四段として追加し、次の第一六五段で在中将の死を収録するに当り、その直前に在中将と弁の御息所の歌話を持ってきて、在中将の死を印象強くした。そして、さいごの第一六六段で、在中将の逸話を補足したのであろう。

したがって、第一六二段から第一六六段までは、気の向くままに、『大和物語』作者が追記して行ったのだろうと考えられる。

〔注〕

(1) 雨海博洋氏「大和物語」(三谷栄一氏編『体系物語文学史』第三巻所収)。

(2) 高橋正治氏校注『大和物語』(日本古典文学全集) 解説。

(3) 高橋正治氏『大和物語』。

(4) 今井源衛氏「大和物語評釈」五十二(「国文学」第十一巻十四号)。

(5) 雨海博洋氏「大和物語の伊勢物語意識—大和一六〇段・一六五段を中心として考察—」(『論叢王朝文学』所収)。

(6) 片桐洋一氏『伊勢物語の研究』研究篇。

(7) 山田清市氏『伊勢物語の成立と伝本の研究』。

(8) 注(6)・(7)に同じ。

(9) 阿部俊子氏『校本大和物語とその研究』。

(10) 南波浩氏校註『大和物語』(日本古典全書) 解説。

(11)〜(13) 今井氏「評釈」五十(「国文学」第十一巻十三号)。

(14) 『日本紀略』、『大鏡』第一巻など。

(15) 注(7)に同じ。

(16) 今井氏「評釈」五十二(「国文学」第十一巻十四号)。

(17) 柿本奨氏『大和物語の注釈と研究』。

(もりもと・しげる　奈良大学教授)